全体会議（分科会報告）

第一分科会（現代と教学）

立正安国とは何か
―現代社会との関わりの中で―

第一日目

〈基調講演について〉

・宮台氏の「正しさの不可能性」は大切なテーマ。「立正安国」に関して、あの講演を我々はどう受け止めるのか？反論が必要。相対的な社会で正法、正しさをどう位置づけるのか。

・宮台氏の主張は相対的な正しさ。宗教者は絶対者を認め、正法の絶対性を認めている。

・「正しさ」について分科会で話しても結論は出ない。それぞれの宗教で正しさはたくさん存在する。我々は法華経の広宣流布を目指せばよい。正しさの議論は机上の空論。実践的、具体的議論が必要。全てを包み込む努力は必要だが、他宗とも仲良くしていかないと。他宗批判は仏教会ではできない。

・宮台氏をなぜ呼んだかと言えば、社会的にはどう考えているか、外部の意見を参考にしたいから。我々の正法は絶対でよい。社会学は正しさを議論してきた。意見が違っても話し合えば真理に近付く期待があったからだが、原理主義、自己中心の世界では難しい。社会学は社会を共通の視点で見られなくなっている。我々は自分が正しいから原理主義的に行動するのか？我々は正しさを持っているが、それが社会全体で認められるかどうかが問題。

・立正安国論は近代社会にとっては古い論文。立正安国論を現代社会に生かすのであれば、宗教者の目で社会を見るのではなく、社会の目線で宗教者を考えないといけない。一般社会の人には「立正」はわからない。工場の管理システムの中で歯車となっている人間には、立正安国は通じない。そのような人々に今の「時」を考え、視点を考えて説いていかなければならない。政教一致、分離を考えても仕方がない。年間自殺者三万人の現代社会において、行動に移さないといけない。布教実践の立場から議論していきたい。

・世間の人に通じなくても、疎んぜられても言わなければならないのが仏様との約束。仏の諫暁逃れ難し。「鎌倉と今は違うから今の考えを」というのは思い上がり。仏様から見たら同じ末法。世間の物差しで見ていくのか、仏様の視点で見ていくのか。常識は世間と仏法で異なる。忍性のように振舞えば現世でも崇められる。世間に合わせたら受け入れられるが仏様から離れる。

・「正しさ」を合意事項として共有したいから話している。聖人のお考えに沿わなければ「日蓮宗」ではない。衆生済度の目的のためには、両方やっていかなければならない。

・ご遺文を拝読するとき、百年、二百年後でも精神は同じ。生きる時代背景で解釈を変えてはならない。何百年後も教師の解釈は保つべき。国は日本であり、アジアから先は次のステップ。同時ではない。

・宮台氏の「正しさ」を認めるのか？行動レベルでは宮台氏に否定される。大曼陀羅を書かれた聖人の精神の正しさが大切。

〈政教一致と政教分離〉

・政治に無干渉で王仏冥合は可能か？

・（問題提起者）宗教者は政治家に戒を授け、政治家は法華精神に基づいて活動するのが王仏冥合。

・今回の狙いは安国論の勉強会ではない。布教の現場の声を聞く場ではないか。
・（提起者）安国論を説くと政教一致を批判されるという現場の問題がある。
・安国論を取り上げた趣旨はわかる。政教分離は一般的に信教の自由を意味する。王仏冥合は気持ちは法華ということ。問題提起には議論の飛躍がある。問題は政治家の心の問題か、創価学会の問題か？
・（提起者）立正安国の世界でも信教の自由は認められる。現代の自由と民主主義の中で四海帰妙を進めて行けるのかということ。
・日蓮聖人の立正安国論を政教一致、分離に分けるのは飛躍がある。立正の「正しさ」を確認しないと、一致、分離は話せない。立正安国の本来の意味が大事。国家、国民、国土を合わせて国体という。欧州の宗教と政治の関係はキリスト教、ユダヤ教、イスラム教など。仏教とは異なる。仏教は全ての人を仏にする。仏になろうとする者と為政者の関係の理解が必要。現宗研では布教の現実について議論すべき。創価学会の国立戒壇、王仏冥合の主張から、政教一致、分離と同じレベルで議論されるようになってしまった。今の創価学会は王仏冥合を言わず、文化、教育、平和などを強調している。創価学会、顕正会と我々の王仏冥合がどう違うのかが大切。欧州と日本の宗教史の違いも念頭に置くべき。我々は日本を世界のコアにしなければならない。そのために何をやるべきかが重要。まずは立正と安国が何であるか、共通認識を持つ必要がある。
・創価学会は折伏大行進を行い、国立戒壇を唱えたが、大石寺の坊さんも疑問を持った。暴力的な折伏は涅槃経のもの。聖人の折伏は結縁を目的とした不軽菩薩の折伏。創価学会の折伏は信者を増やすことが目標の権力志向の折伏。聖人や先師の諫暁の結果、国教化はできなかったが、結縁はできた。
・立正安国は政教一致ではありえない。公明党が多数となることは問題。
・（提起者）宗教者が政治に介入するのは問題と言われる。立正安国論は宗教の書であり、政治の書ではない。マスコ

ミ等の一般社会に対し、仏教精神での立正安国を説明できなければいけない。
・宗教者と政治家で立正安国論の読み方、受け方は違う。立場によって読み方が違うが、世の中を正しい方向に向かわせ、安んずることが宗教者の役割。
・(提起者)勧学院は議論を避ける。左翼からは立正安国論＝政教一致と否定される。立正安国封印論のもある。議論をしていく必要がある。

〈立正の「正」について／法華経、お題目、三秘〉
・浅井先生の説では、立正安国論に「正しさ」は書かれておらず、開、本両抄で顕説されたとなっている。
・高木先生は、立正安国論は三九歳の聖人の書かれたものだが、聖人御一代の教学の立場から読むことも意味があると言われている。
・立正安国は聖人ご生涯を通じてのお考えであり、立正安国論、如説修行抄、観心本尊抄、当体義鈔の四つのご遺文から理解できる。
・法華経とお題目は本質的には同じだが、五字と七字で「南無」が異なる。七字は末代の凡夫のためにあり、仏になる唯一の可能性。

〈安国の「国」について／日本、世界、宇宙〉
・立正安国論には他国侵逼が示されているので国は日本を指す。お題目結縁は全世界、宇宙が目標。
・聖人の当時のお考えに基づくなら国は日本。日本がコアとなって法華経を広める。
・当時の時代背景として、世界、宇宙の感覚はあったのか？

・（提起者）唯識、倶舎の議論から、世界、宇宙の概念はあった。聖人は世界を表す際には「閻浮提」を使われている。
・「正」は法華経、「国」は日本。むしろ、動詞である「立」、「安」の方が、具体的な行動を起こす際に問題になる。現代社会でそのままで良いのか？「立」を敷衍して考えて良いのか？
・「正」、「国」について、今この場で話すのが有意義なのか？「現代社会との関わりの中で」と言うなら、言葉尻で時間をつぶすべきではない。

第二日目

＜立正安国の世界は武装か非武装か＞

・非武装中立は国の存在としての理想論で現実的ではない。聖人は防衛を否定されていない。ご遺文では国防を否定できない。国の安全、存在の保全は最大の福祉、基盤。聖人は現実路線を進まれたはず。武装であっても専守防衛は基本中の基本。
・集団的自衛権は次のレベルの議論。人が身を守る、国が守るのは自然権。聖人は非武装とは言われない。身延にも馬、弓、刀を備えてあった。小松原の法難から、身延も万が一の備えをした。現実を考えてから理想へ向かうべき。檀信徒に対し、自衛隊は憲法違反とは言えない。
・立正安国論には武装放棄は出ていないが、正法に帰依すれば他国侵逼はないから、武装放棄になるのではないか。不軽菩薩は抵抗しなかった。武器の保持は殺生戒に触れるのでは。
・武士は武士の力を結集して他国侵逼に備えろというのが聖人のお考え。不軽菩薩の但行礼拝だけなら、身延が攻められても武器の備蓄は必要ない。不軽菩薩は折伏逆化だが、身の危険を守るのは自然。最近の先生たちの立正安国論の講義には他国侵逼が出てこない。立正安国が但行礼拝にすりかえられている。

・（提起者）聖人は殺生戒よりも正法護持を優先されたのではないか。仏教には、捨戒、国家優先の考えもある。釈迦族は因果の道理に勝てなかった。釈迦族が滅ぶことで道理が示された。南北朝鮮は目の前に軍備があり、日本人の平和論は甘いと言われる。仏教者には、机上の空論的平和論ではなく、現実を見据えた平和論が必要ではないか。

・一番小さな「国」は「家」と考えられる。家を守るのには鍵をかける。外出するときも警戒心はある。最小でも、自衛、防衛は必要。立正安国は恒久平和を目指すものだが、そこに至るまでにどういう態度をとるかは難しい。

・聖人の鎌倉における厳しい環境下での布教を考えれば、立正安国と憲法九条についての議論先行ではなく、立正平和運動を体験してから議論すべき。布教の現場において立正安国の意味を考えたい。

・立正安国、平和運動が出てきて、宗門が混乱している。この部会は、聖人のお考えと現代の議論が混ざっている。現代教学部会は聖人のお言葉だけの議論ではないはず。個人的には専守防衛の立場。僧侶だが日本人であることの矛盾がある。宗教では戦争は人殺しだが市民としては専守防衛が必要と考える。聖人が武器を持ったのは止むを得ずではないか。他国から侵略されない確証はない。

・専守防衛は正法護持のため。今の日本がつぶれて残るものがあるのか。立正安国が実現された完成形なら非武装だが、現在進行形では専守防衛。非武装で日本が滅びては法華経がなくなる。滅びた場合、その態度の根底に法華経精神があったことは残らない。法華経の根絶につながる。

・平和といわれると反論できないのが僧侶の弱点。色々な立場の平和があるのに、反論も分析もできない。「平和」の言葉は怪しい。中国、ロシア、北朝鮮などが地雷の輸出をやめてから、日本も地雷の使用をやめるべき。専守防衛は戦場が国内になる。平和運動は内容を吟味してから進める必要がある。

・仏法の理想は我此土安穏、非武装の世界。しかし現実的ではない。通過点、過程では武装も一概に悪ではない。現時点では集団的自衛権までは想定していない。

・（提起者）聖人は理想と現実を分けられていない。現世は娑婆、三界であり、六道輪廻から逃れない。理想も非武装ではない。

・聖人のお考えは引き継ぐが、現代社会で何ができるか考えるべき。仏教者は非武装中立であるべき。お檀家さんに自衛隊員がいても、仏教者としては不殺生、非武装中立。世法では現実問題がある。立正安国を現代に生かすには、貿易輸出でも他国のことを考えるのが立正安国。安心な家、地域、社会を作っていくには、折伏ではできない。他宗も認めながら直していく精神が必要。

・聖人は、有徳王など、正法護持のためなら殺生戒を犯しても良いとされていた。

・集団的自衛権を認める専守防衛であれば、他国へも自衛隊を派遣しなければならない危惧がある。

・自分を守る、共同体を守るのは当然。立正安国は、十界曼陀羅が完成された世界だが、四方は四天王に守られている。

・平和が続いたのは憲法九条のお蔭。宗教目標は立正安国。方法論は信仰から。損得ではなく、本門の本仏にどう近付くか。

・憲法九条は理想と現実のギャップがある。泥棒に対しては自己防衛しないといけない。非核、非武装で裸になれるのか？人類の永遠の平和は永遠に訪れないのではないかと感じながら憲法九条を守る運動を続けている。全人類が平等にならなければ殺し合いは永遠に続く。殺されることを業として受け入れることが平和への道。自衛隊がいて平和が守られているのは現実。わかっていて言っている。

〈天災〉

・人の心が乱れ、その地が乱れているから天災が起きるという話があった。災害の起こった同じ場所に家を建てる（土地に執着する）のが人の心の乱れのせい、とは主張できない。

第二分科会（教団・教化）

社会が必要とする僧侶になれるのか
―立正安国の視点から―

伊藤美妙師より「宗教者としては、今苦しんでいる人を目の前にして手を差し伸べないではいられないのではないか。しかし、自分は周りの人の苦に真摯に向き合い救済しているだろうかと考えました。現在、檀家制度で成り立っており、主たる活動は月忌参りであり、法事であり、葬儀である。このような活動ではいずれ社会から必要とされなくなるのではないだろうかと危惧をしている。宗教離れしている現代において、せめて法事・葬儀だけでも心を込めて行いたい、少しでも仏教を知ってもらいたいと願い行ってきているが、なかなか対応できていない。葬儀の後、四九日しか行われないと遺族に接する機会すらなくなっている。一般の人たちは、自分の持っている苦をどのように解決しているのか。新興宗教や細木数子・オーラの泉などの一般的なところに解決を求めているのだから、苦に対して答えてくれたり、共に悩んでくれる人を必要としている。それらに我々は答え抜苦与楽、苦を取り除き、希望を与えるだけでなく苦を受容して苦でなくなるような行動を教え示すことも我々の役割ではないか。」と問題提起された。

参加者にとって立正安国とはなにか。地域、社会を表す国であり、民の意志。国構えの中の玉の字は、豊を表している。心豊かな人々の住む国。

抜苦与楽。悪苦を取り除いて、楽しみを与える。悪苦如何に受け入れ、その先に楽しみ、幸せがある。生き甲斐が楽である。

以上

苦を取り除くために、一般社会の人、檀信徒の人でもカウンセラーのところへ行くが我々僧侶の下へは中々来ないのは何故か。僧侶は難しい言葉を使う。上からものを言う。相手の話を最後まで聞かないで途中で、意見を言う。

檀家や地域の人々との信頼関係を築くことが大切、自分のできることを行って必要とされる人になっていく。ということが一日目のまとめ。

「個人だけではできないことがあり、宗門などが活動する人をバックアップする体制も必要だが、何が必要か」と二日目の問題提起があった。

分科会の運営について

座長が、以前に中央教研に一般参加者として参加したときに発言をさせてもらい、会議に参加してよかったと思った経験から、全員に指名して発言を求めたが、自分の言いたいことを言うだけの場となってしまって討議ができなかった。本当は、出た意見に対して掛け合いのような形で討議ができるとよかったが、ほんの少ししかなかった。今後活発化するためには、どのようにしたらよいか。参加者がきて本当によかったと思う会議にするためにはどの様にしたらよいか。

一〇人から一五人くらいの分散会にしたらよい。

現状を説明の上でどうしたらよいかと話を進めたが、これからこのようになると思われるが皆さんはどの様に対処しますかと話を進めた方がよい。テーマが漠然としすぎていて、それぞれの意見が深く深く個人的な内容になってしまった。具体的な方がよい。

問題提起の内容を、少し過激すぎるくらいにして、「これは意見をしてやらなくてはならない」と思わせる雰囲気があるとよいのでは。

活動報告に終始してしまったために、会議と言うより発表会になってしまった。僧侶は地盤、看板、伝統、信用などの武器があるが、足りないものがある。それは、世間を知らないとか、謙虚さが足りないなどで、答えの数を持っていないことである。宮台先生の話から、僧侶の目線で見るのではなく、一般社会の目線で見なくてはならない。分散会で、討議をして最後に分科会内で全体会議をするとよいのでは。

第三分科会（現代社会）

社会を変えられる寺院とは
―人々の心をつかむためにはどうしたらよいのか（ディベート）―

今回のメインテーマが「宗教者と社会の関わり」となったことは、われわれ現代社会ＰＪへの比重が大きくなったことと受け止め、それは同時に昨年の分科会議論の延長線上にあることであり、昨年の経験、資料などを役立てることができると思いました。それにより、今回は昨年以上に掘り下げた内容を期待し、話し合いの結果として、具体的な提言をまとめたいと考えました。

そのために、会議の形としては、昨年同様に少人数の分散会に分けて、参加者の本音の意見を多く引き出したいということでした。その突破口として「ディベート方式」を採用しました。討議のテーマは「寺院、僧侶はこれからの社会に必要か、必要ではないか」とし、運営側としては、事前の疑似討議の時のように「必要でない」という意見が断然優勢となり、それらの意見の中から今後の課題を見つけられるという思惑でした。しかしながら、三つに分かれた分散会では同様に、運営側が予想したような方向への盛り上がりはありませんでしたが、参加者全員から様々な意見を聞くことができ、現状の問題点が数多く明らかになり、「ディベート方式」を採用したことで、それなりの効果は生まれたものと感じました。

二日目に向けては再度作戦を練り直し、昨年の資料も参考に、現実に起こっている現代社会の変質について話し合い、今年の分科会テーマに沿い、社会を変えられる寺院とは、日蓮宗教師として今何ができるのか、為すべきなのかという具体的な意見交換をお願いしました。その結果、各分散会に共通した意見としては、僧侶自身の資質を問題視

した自省も含めた意見が中心となり、出家者としての意識、信仰心の不足が指摘され、今のわれわれには救済を語る資格はないという厳しい意見もあり、その原因として、師弟関係の崩壊があげられた。また様々な現実の問題に対し、個々の寺院、僧侶が適切な対応を素早く実行することが第一条件であり、実際めざましい活動を続けている例は多く存在するが、宗門全体としてのつながりのある大きな力にはなっていないとの指摘も共通していた。

ここで分散会毎の具体的な意見をいくつか紹介いたします。

分散会A（黒木座長、小林記録員）

1、物質的な問題

・コミュニティーの場として期待する一方で敷居が高いと感じている。

・お寺にはお金がかかる。

・お坊さんの生活を見て、生活水準が高いと感じる。

・供養、葬儀から感動と感謝の気持ち涌かない。

2、精神的な問題

・心のカウンセラーとして期待するが、話をしたり聞いたりしてくれない。

・他からあこがれられる人物になるように、資質の向上につとめる。

3、伝え方の問題

・話が専門的すぎて、気楽に質問ができない。

・上からものを言われているようで、また自慢話にも聞こえる。

・仏、お題目、仏事、葬儀などの意味をわかりやすく伝える工夫が必要。

4、現実性の問題

・地域、人との交流の中心としての寺、僧侶が求められている。

・僧侶に対するイメージの低下。その原因として、信仰心の欠如、発心の忘却、自己生活安定のあまえによる社会情勢の検知不足、現実の危機意識不足などが考えられる。

分散会B（梅森座長、三好記録員）

・社会の価値観で動くのではなく、聖なる僧侶の存在として活動することで世間の目も変化する。

・個々に活動はしているが宗門が何を目指しているのかがわからない。

・社会的な問題に対して、宗門が宗教的な見解表示を避けている。

・宗門として、対外的な人材の育成が必要。

・このような会議に内局のスタッフの参加がないのはおかしいのでは。

・宮台先生の講演は、世俗的に混乱している現代だからこそ、宗教者ががんばれというエールに受け止めた。

・ディベートでは個々が真剣に考えていることは感じたが、現実問題や世間苦についての意見が少なく、地域格差にこだわった話が多かった。

・宗門全体について語り合う中で、寺庭婦人に関する話題が皆無だった。

分散会C（川名座長、坂輪記録員）

・我々の発想の転換が不可欠。

・小僧修行の欠如が問題。
・核家族化の中で、子どもへのアプローチが必要。
・魂の存在、死後の世界を信じる人が激減（二〇％）しているのに、宗教的意味を伝えられていない。
・宗教はよいが、寺・坊さんはイヤだと感じている人が多い。それは一般社会の価値観に埋没していて、日々の努力精進している姿が見えてこないためであろう。
・我々の共通認識を拡大する手立てが必要。
・急激に変質している現代社会の中で、宗門全体が一つになっての行動は容易ではなく、個々の地域、立場で社会変化に適切な対応を素早く実行することが必要で、そのための有効な情報を宗門が提供して欲しい。このような個々の努力、成果がまとまった力になっていない。

全体の印象としては、参加者の現状に対する危機意識、問題意識が的確かつ充分とは言い難く、相変わらず様々な面での個々の格差が露呈した。しかしながら参加者各聖の日々の誠実な活動ぶりが感じられ、この努力を連係、継続させるためには、中央と管区教研との連係システムを再構築することが急務であり、このことなしでは宗門として社会に影響力を示すことは不可能であろうと思われます。また、基調講演の内容が具体性に乏しかったので、分科会へつなげることができなかったことは、想定外のことであった。

後半、印象深く残ったことは、木村顧問の「寺院は過去の歴史の中で常に、世直しされる側であり、このことは今も変わっていない」という指摘であった。

最後に四〇回を迎え、今日までの先師の努力と、今回の中央教研運営スタッフのご苦労に敬意を表し、まとめといたします。

（現代社会ＰＪ）